



## Toward and beyond the Award

福井大学学術研究院医学系部門特命助教

炭竈 享司

(第8回 入澤宏・彩記念若手研究奨励賞

[イオンチャネル・トランスポーター部門] 受賞)



研究室の門を叩いてから10年以上、コンピュータ顕微鏡(と私は呼ぶが、一般にはシミュレーションと言われる)を用いてチャネルの研究をして来た。したがって、本授賞は研究者人生の1つのクライマックスと感じている。

私は化学科の出身であり、大学院時代は「チャネル研究は医学の発展に役立つ」と尤もらしいセリフを吹聴して学科の教師等を騙し騙し発表などしていたが、自分の言葉に実感はなかった。そもそも、チャネルをイオンが透過する「動き」に興味はあったが、チャネルには興味がなかったのだ(実はシミュレーション(方法論)にも根本的な興味はない)。当研究室に来て筋肉や神経でのチャネルの役割を実習するようになり、剖出したカエルの心臓が動き続けるのを見て感動する学生を横目に、「ホントだったんだ…」と自分の方が驚いていた。生理学会では「コンピュータ」「シミュレーション」などの単語がタイトルにあれば目に留めてくれる人もいるだろうと発表した。誰も立ち止まらなかった。私の研究は、電気生理学的に実測される電流-電圧、電流(コンダクタンス)-濃度曲線の形状や電流値がチャネルのどの部位により決まるのか、コンピュータ顕微鏡で原子やイオン一個一個の動きを「観察」してその理論を究明し…と偉そうに言ったところで、流石に生理学者まで「医学の役に立つ」と騙すことは難しかったらしい。そう思い始めていた矢先だったので、受賞は大変な驚きであり、同時に多少は認めてもらえたのかな?と望外の喜びでもある。

さて、この賞の後どこに向かうのか?我々の次の論文で、イオンの透過と選択性の関係、つまり選択性の起源を解明できると思っている(その時は、生理学会は今度はどんな賞をくれるのだろうか?)。大学院の恩師は「良い論文は、研究はそこで終わるから、しばらくは引用されない」と言っていた。引用されるかどうかはさておき、前述の不遜な考え故か、透過や選択性への興味が薄れつつあり、自分の研究の1つの終焉一リヒャルト・シュトラウスの「夕映えの中で」に聴く澄み切った陰鬱に近い一を心のどこかに感じる。夕闇の先に何があるのか?そこに再び日の昇る未来の可能性があると信じるか否かは、若さの問題かもしれない。その点で、若手とは言えなくなりつつある今、科学者としての遺伝子を次世代に残すことも新たな目標と感じている。自身の研究者としての限界を感じさせてくれるような私を乗り越えて行く若者を育てられるなら教育者としては本望であるし、そのような人が確実に育ちつつあると感じている。また、科学の裾野を広げ、若手の活躍できる環境を整備し続けることも、年寄の未来への責務だろう。

## 略歴

2008年名古屋大学大学院理学研究科博士課程修了

名古屋大学GCOE研究員、分子科学研究所研究員を経て現職